人工衛星GeoEye-1がとらえた「福岡空港周辺」（1）

データ提供：日本スペースイメージング株式会社
データ処理：東京理科大学・国土情報工学研究会

本誌94号から人工衛星GeoEye-1から見た「国土の姿」を紹介します。GeoEye-1は、2008年9月6日（米国日付）に打ち上げられ、IKONOS衛星の後継機に位置付けられています。可視から近赤外にわたる観測波長帯域において4バンドのデータを観測し、地上分解能はパンクロマチック画像で0.5m、マルチスペクトル画像で2.0mです。下図は、これらを合成した福岡空港周辺のトゥルーカラー合成画像（Pan-sharpened image：地上分解能0.5m）です。福岡空港は中心市街地から至近距離に位置する空港として知られ、国内空港網の拠点となっています。航空機の大きさの違い、駐車場や道路上の車の分布状況は言うまでもなく、滑走路のレーンマークまでもがはっきりと判読できます。高分解能衛星データは、地表面を広域に分析する支援策の一つとして大きな役割を担っています。